

# 英語で日本文学を教える教育実践： 国際的教育の試み

孫 世 偉

はじめに

本論文は、2022年10月1日～2日にオンラインにて行われた国際学会「Intercultural Education On the Move: Facing Old and New Challenges」(International Association for Intercultural Education 主催)における口頭発表をもとに、加筆修正したものである。また、本研究に際し、筆者が研究分担者として参加している研究課題「コロナ時代の高等教育頭脳循環の国際比較研究—新たなモデル構築に向けて」(JSPS 科研費 JP21H00881)の一部の成果である。IAIE 関係者、Hellenic Open University の諸先生、科研プロジェクトメンバーなどに感謝を申し上げる。

## 1 英語による日本文学講義の背景について

昨今、欧米などの大学では東アジア地域(中国、日本、韓国を中心に)の言語、文学、文化を専門とするアカデミック組織を設け、様々な学部レベルのコースを教育コンテンツとして提供する高等教育機関が増えている。青山学院大学文学部のかねてよりの方向性である国際化の一環として、筆者は2020年度より本学に赴任し、英語による日本文学の講義を五つ担当してきた。内訳として、青山スタンダード科目を2コマ、文学部共通科目を1コマ、日本文学科における開講は2コマである。本論文で言及する対象は、主に青山スタンダードで開講した「文学A, B」「文学史A, B」に焦点を絞っている。いずれの科目も明治以前の古典文学を中心に、上代から近世に入るまでの時代を横断し、幅広く歴史的コンテキストや著名な作品などを紹介するサーベイコースで

ある。

筆者自身の経歴としては、アメリカ・コロンビア大学の東アジア言語文化研究科（East Asian Languages and Cultures）で M.A. を取得したのち、カリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）のアジア言語文化研究科（Asian Languages and Cultures）で Ph.D. を取得している。とりわけカリフォルニア大学ではフェローシップの一環として、ティーチング・アシスタントで学部の授業を担当していた。英語を用いて主な指導用言語としている上記の両大学では、日本文学の授業もやはり英語で行われており、日本語を外国語として勉強する傍ら、アカデミックコースとして日本文学の勉強ができる。日本語の語学力が備わってなくても、受講や履修は可能になっている。

さて本学における筆者の担当授業において、当初想定される受講者は、主に英語を話す留学生である。本学国際センターが推進する IPJS（International Program of Japanese Studies）に備え、交換留学生が主な対象に当たる。英語による授業の履修が可能な学部生をターゲットにしたもので、授業の進め方やスタイルは基本的に筆者の経験に基づき、北米の高等教育機関で提供される学部授業と類似したものを策定した。北米の大学と同じく、留学生の日本語の語学力のいかんを問わず、受講することが可能である。

ところが、2020年度の前期から、COVID-19 新型コロナウイルス感染症の世界的流行の影響により、社会活動に厳しい行動制限が要請され、本学の講義等も例にもれずオンラインに切り替わった<sup>(注1)</sup>。学部生の学びやキャンパス生活が大きく影響される中、留学生に至っては、さらに困難な状況を強いられた。入国制限の影響で、海外より新規の入国や査証の発給が停止され、期間中にインバウンドの留学生の数が大幅に減少した。こうした状況を受け、筆者の担当授業は、本来ターゲットとした主な教育対象を失うことになった。

新規入国の学生や交換留学生を受け付けることができない中、入国制限措置以前から在籍している留学生や、国籍を問わず英語等を主な指導言語に用いた教育機関（インターナショナル・スクール等）で学んだ教育背景を持つ学部生など、英語によるコミュニケーションを不自由なくスムーズにできる対象を除

き、日本語を母語とするネイティブの学生もわずかながら筆者の当該授業を履修した。しかしながら、これはあくまでも例外的なケースである。日本文学科の在籍生をはじめ、日本語ネイティブ話者の学部生の中で、英語で日本文学を学ぼうとする人数は、筆者が担当する日本文学科の日本語による講義に比べ、明らかに履修者数に顕著な差が生じている。

## 2 日本語ネイティブの学部生が英語で日本文学を勉強するモチベーション

筆者が在籍していた北米の高等教育機関と比較する場合、相対的に日本の大学では文化的同質性が高い特徴を持つ<sup>(注2)</sup>。日本の大学等で学ぶ留学生の数と比べて、日本語を母国語とする、あるいは主に日本語で教育を受けてきた学生の数が圧倒的に多いのである。例えば、新型コロナウイルス感染症のパンデミックが起きる2020年5月までの統計では、日本語学校を除いた外国人留学生の全体の数は218,783人<sup>(注3)</sup>だが、同じ時期の大学等教育機関の学部生の数は、2,623,572人<sup>(注4)</sup>にのぼり、12倍近くの差を見せている。

青山学院大学では、上記のように新型コロナウイルス感染症の影響を受け、2022年5月までのデータによれば、学部生全体の18,991人中、留学生は295人である<sup>(注5)</sup>。

以上のデータが示したように、青山学院大学、ひいては日本の大学において、日本語ネイティブ話者の数は圧倒的に多く、主な教育対象を占めている。学部授業の多くは日本語で開講される一方、英語による開講科目も多数提供されているのだが、英語で行う日本文学の授業に関していえば、例外的である。日本文学の関連授業に至っては、各分野の日本古典文学や文化をテーマに据えた授業が多数開講され、母国語話者や、学部レベルで勉学できる日本語の語学力を持つ学部生であれば、わざわざ英語による開講科目を受講しなくとも、関連する知識を習得することができるのである。

## 3 受講者の期待とのミスマッチ

無論、外国語としての英語の重要性は、グローバル化が加速度的に進む昨今

の世界的流れを受け、本学でも他大学でもしきりに強調されている。語学力は就職活動等のキャリア形成に有利に働く学部生の意識もあるので、英語の授業ということだけで敬遠されるわけではない。しかしながら、筆者の授業デザインは、あくまでもコンテンツを中心に据え、いわば「英語を使って、日本文学を勉強する」という性質のもので、英語そのものを勉強する目的のものではない。以下は、履修者 A と履修者 B が筆者の授業を受けた感想の一部を抜粋したものである。

英語はそこまで得意ではなかったが、スライドや先生の解説もあり、理解が少し早くなってよかった。(学生 A)

英語講義ということで、自分にとってとてもチャレンジングな授業でしたが、本当に受講してよかったと思います。当講義で得た知識やリスニング力、ライティング力をこのまま継続していきたいと思います。(学生 B)

このように、日本語ネイティブ話者の履修者が、本授業に対する教育ターゲットが期待とミスマッチする結果に繋がることが見られる。両者とも非英語母国語話者の立場から当該授業を履修したが、この経験を概ね肯定的な評価をしたので、履修者にとってある程度の教育的効果があったのではないかと推測できる。無論、これ自体はポジティブな結果として歓迎すべきことではあるが、ジェネラル・エデュケーションの科目として、本来の教育目的としては達成したとは限らない。日本の古典文学を通して、歴史や時代背景を知り、作品を味わい、当時の人々の思想、考え方、美意識などに触れることで、俯瞰的・多角的に日本文化を見つめ直し、伝統に対する固定観念に一石を投じ、クリティカル・シンキングのスキルを養ってもらうのが、当該授業が本来目指すところである。しかしながら、授業のコンテンツそのものよりも、学生 A と学生 B の期待は、むしろ英語の語学力を磨くほうに重きを置いているように伺える。繰り返しになるが、語学の授業として計画したわけではないので、狙い以外の教育効果が副次的に生じたのは偶然の賜物にほかならない。

さて本論文を執筆する2022年後期の時点では、新型コロナウイルス感染症によるパンデミックは完全に去ったわけではないものの、諸外国の前例に倣い、日本政府も社会経済活動の「正常化」へと舵を切り、外国人留学生の受け入れも再開されている。交換留学生の入国が可能になったことに伴い、本来の教育対象が多く当該授業に参加することになった。履修者のほとんどが留学生によって構成される英語講義とは対照的に、筆者が日本文学科で担当する日本語による講読科目では、履修生のほとんどが日本語ネイティブ話者の学部生で構成されている。一見、それぞれの学生がニーズのある落ち着くべきところにそれぞれ落ち着き、教育ターゲットのミスマッチは解消されている。しかしながら、あえてここで問いたいのは、「日本人学生は日本語で日本文学を勉強する」「外国人留学生は英語で日本文学を勉強する」という二分法的な棲み分けでは、真の意味でキャンパスの国際化に資するものだと言えるだろうか。

Adachi (2009) によれば、日本語ネイティブの学部生が英語を勉強するモチベーションは様々考えられるが、社会的側面、文化的側面などの諸要素は複雑に絡んでいる。中でも、学問や知識を通して、インテレクチュアル・コミュニケーションも動機付けの一つに挙げられる。英語そのものではなく、英語を通して達成される目標が重要視されるべきである。

パンデミックの中において、数少ない日本語ネイティブ話者の学部生履修者がいると言及したが、残念ながら、日本文学科の学生はほぼいなかった。当該授業の達成目標でいうと、日本文学についての知識や習熟は含まれているが、それだったら日本語ができる日本人が日本語による授業で勉強した方が手取り早いのではないか、わざわざ回り道までして翻訳を通じて外国語である英語で勉強するメリットは皆無ではないか、という反論も筋が通る部分があるだろう。特に、日本文学科の学部生に関しては、日本文学への関心を深め、学びを通じて現代語だけでなく、歴史的に使用されてきた文語を読み解くための力を身につけるためには更なる努力が必要で、なおさら英語で日本文学を勉強する必要性を感じないのも理解できる。これについては、次節で考える。

#### 4 第三者による客観的視点を獲得する重要性

留学生受け入れ再開になってから、ミスマッチは解決できたこと自体は無論歓迎すべきことだが、コンテンツ自体は日本文学である以上、もっと多くの日本語ネイティブ話者の学生に参加してもらうことこそ理想的だと考える。端的に言う、「日本語ができるから英語で勉強しなくてもよい」のではなく、むしろ日本の伝統文化に大きな関心を寄せているからこそ、一度英語を含めた外国語で日本文学を勉強すべきだと筆者は主張する。ネイティブだからこそ、自らの文化的アイデンティティを含め、その伝統の特質をより深く掘り下げるため、第三者の目線、客観的視点は大きいその助けになるからである。英語は知識を得るための単なる道具にすぎないというツール論の視点では、言葉そのものが文化や思考様式を体現する vehicle であることを見過ごしていまい、著しく発想を狭めかねないのである。

特に当該授業のように学習するコンテンツが日本文学の場合、なおさら第三者の視点が不可欠である。周知のように、日本は歴史的にリテラシーの成り立ちから、文学をはじめ、伝統文化、宗教、思想などの多くの面で、朝鮮半島などを經由して大陸文明やインドの仏教（中華化されたものにせよ）など、様々なインスピレーションを受け発展してきた。いわゆる「自土」や「本朝」を銘打って日本で作られた歴史的テキストの多くにも、先行する大陸文化の前例を念頭に置いており、編者や作者たちは、それらの作品を享受しているので、どこまでが「ネイティブ」で、どこまでが「外来」の影響なのかの線引きすることがそもそも難しい。しかしながら、明治以降の近代国家づくりの一環として、国民国家（ナショナル・ステート）のアイデンティティと響き合う「国文学」「国語」という枠組みを強調するあまり、二分法的に「日本」と「日本以外」の境界線が意識的に引かれ、その影響が色濃く近代教育の中に痕跡を残している。このようなナショナリスティックな視点で日本文学を見つめていると、個人としての「国民」と、ネイションを体現するイデオロギーで定義される「国語」「国文」との境界線もぼやけていき、自分自身と自分が無条件に所属するであろう「伝統」と一体化してしまう。そうになると、「日本人であるから」「日本語

ができる」からと、労せず日本文学の精華を自然に体得できるような錯覚に陥ってしまうリスクを孕んでいる。いわゆる「日本文学の精華」とはなにか、それをどう定義するか、そもそもそのようなものがあるかどうかはさておき、とりわけ太平洋戦争戦時下になると、プロパガンダ色が強まる言説が幅を利かせることにつれ、古典文学が制作された時代の歴史的コンテクストや作者の周辺環境を顧みず、「日本精神」という極めて単純化した図式で取り上げる作品を取捨選択し、戦意高揚の目的に転用させてしまう。日本の古典を手放しに礼賛し、世界のどの民族のどの文学をも凌駕するという思考停止に陥った過去があっただけに、客観性を失った危険性を改めて意識する必要があるだろう。

無論、英語で日本文学を勉強すること自体、多くの制約が存在する。作品を読むにしても、当該授業の場合英訳で読むことになるが、Beichman (1983) が自らの教育実践を通して指摘しているように、どれほど優れた名訳であっても、作品の本来の姿を完全に伝えることができない<sup>(註6)</sup>。しかしながら、あくまで本来のニュアンスがもれなく伝わったか否かということではなく、どのようにして訳文ではこのような解釈が生まれ、この訳が英語を話す読者から見てどのように受け止められているかなど、訳出される側の文化を知る機会にもなる上、一度自らのネイティブ文化から離れて、客観的にテキストを見つめ直す手がかりにもなりうる。このことこそ、貴重な機会ではないかと考える。

下記の書き込みは、当該授業を履修した英米文学科の学生Cによるものである。平安時代の宮廷文学と、19世紀のイギリスとは歴史的文脈が大きく異なることもあり、単純な比較は困難だが、このような視点を持つことは、イギリス文学の理解にも、日本文学の理解にも有益なものではないかと考える。

The Bureau of Poetry or “Wakadokoro” reminded me of the literary salons hosted by major poets and leading philosophers of 19th century England, such as Lord Byron and William Godwin. Ono no Komachi, the only poetress included in the “Rokkasen,” was brought up much like Mary Shelley, the acclaimed author of “Frankenstein.” ...It was interesting to make the

connection between Western culture, and to learn that in all parts of the world, a similar social structure birthed the legendary figures in society.  
(学生 C)

## 5 結びにかえて

ジェネラル・エデュケーションの目標として、ひいては学部教育の使命として、グローバル・コンピテンシーを身につけてもらうことが、その一つに数えられる。グローバル化が加速的に進む世界において、自らが属する地域社会をはじめ、違う地域や文化に所属し、違う価値観を持つ人々の視点を大切に持つべきである。異文化に関わる問題に関心を持ち、第三者の視点や世界観を理解することに努め、その価値を認め、異文化の人々と協働し、来るべきグローバル社会の持続可能な発展に必要な不可欠なものである。「英語が喋れるようになったら、自然に国際的視野を手に入れる」のような視野狭窄に陥ることなく、その先にある異文化の価値観を理解につとめ尊重することこそ肝心である。

筆者の専門とする日本文学は、幸いにして、本質的には「国際的」色彩や「異文化」をふんだんにその発展の途上で取り組んで、内在化しながら変化を遂げてきた特徴をもっている。日本文学の「国際化」のためにも、英語で読んでみるススメではなく、そもそも日本の古典文学はその成り立ちからして「国際的」だったことを再度掲げ、結びとする。

### 注

- 注1 筆者が行ったオンライン授業に関しては、青山スタンダード論集第16号（2021年1月）に掲載される拙論「オンデマンド方式の英語講義で日本文学を教える：コロナ感染症の中の実践と課題」で紹介している。
- 注2 Education Data Initiativeの集計によると、2020年のアメリカの学部在籍者数はおよそ1600万に達するが、白人やCaucasian学生の比例は51.6%である。  
<https://educationdata.org/college-enrollment-statistics>
- 注3 独立行政法人日本学生支援機構（JASSO）による調査結果を参照。  
[https://www.studyinjapan.go.jp/en/\\_mt/2022/03/date2021z\\_e.pdf](https://www.studyinjapan.go.jp/en/_mt/2022/03/date2021z_e.pdf)
- 注4 文部科学省「文部科学統計要覧」令和3年版を参照。  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/toukei/002/002b/1417059\\_00006.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/002/002b/1417059_00006.htm)



注5 青山学院大学公式サイトによる公表データを参照。

<http://www.aoyama.ac.jp/outline/information/student/>

[https://www.iec.aoyama.ac.jp/int\\_exchange/data](https://www.iec.aoyama.ac.jp/int_exchange/data)

注6 翻訳の問題について言えば、日本語と外国語訳の問題だけでなく、古典の現代語訳も大きな課題である。本稿では割愛するが、日本文学の場合、古典語をどのような現代語に置き換えれば相応しいのかだけでなく、本文の性質によって（例えば上代文学の漢字本文など）、ファーストハンドな享受は翻刻によって失われる場合も考えられる。古典語の現代語訳の問題を考えるに際しても、外国語訳のあり方は大いに参考に資するであろう。

### 参考文献

- ADACHI, Rie. 2009. Motivation of English Learning and Intercultural Communication: A Case of Japanese College Students. *Journal of School of Foreign Languages*. 37, 119-143, 2009-08. Nagoya University of Foreign Studies.
- BEICHMAN, Janie. 1983. Teaching Japanese Literature and Translation in Tandem. *The Journal of the Association of Teachers of Japanese*, Nov., 1983, Vol.18, No.2. American Association of Teachers of Japanese.
- COLEMAN, Samuel. 2009. Teaching Culture in Japanese Language Programs at the University Level: Insights from the Social and Behavioral Sciences. *Japanese Language and Literature*, Oct 2009, Vol. 43, No. 2. American Association of Teachers of Japanese.
- KUBOTA, Ryuko. Fostering Antiracist Engagement in Japanese Language Teaching. *Japanese Language and Literature*, Oct 2020, Vol. 54, No. 2. American Association of Teachers of Japanese.
- MULHERN, Chieko Irie. On Teaching Japanese Literature. *The Journal of the Association of Teachers of Japanese*, Apr., 1981, Vol.16, No.1. American Association of Teachers of Japanese.
- SHIRANE, Haruo. Redefining Classical Japanese Literature and Language: Crisis and Opportunity. *Japanese Language and Literature*, Oct 2003, Vol. 37, No. 2. American Association of Teachers of Japanese.

### データベース等

JASSO, Result of International Student Survey in Japan, 2021.

[https://www.studyinjapan.go.jp/en/\\_mt/2022/03/date2021z\\_e.pdf](https://www.studyinjapan.go.jp/en/_mt/2022/03/date2021z_e.pdf)

Educational Data Initiative, <https://educationdata.org/college-enrollment-statistics>

[https://www.studyinjapan.go.jp/en/\\_mt/2022/03/date2021z\\_e.pdf](https://www.studyinjapan.go.jp/en/_mt/2022/03/date2021z_e.pdf)

MEXT 文部科学統計要覧. 2021.

[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/toukei/002/002b/1417059\\_00006.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/002/002b/1417059_00006.htm)

Aoyama Gakuin University. Statistic Numbers on Students, 2022.

<http://www.aoyama.ac.jp/outline/information/student/>

International Center of Aoyama Gakuin University, Statistic Numbers on International

英語で日本文学を教える教育実践：国際的教育の試み

Students, 2022.

[https://www.iec.aoyama.ac.jp/int\\_exchange/data](https://www.iec.aoyama.ac.jp/int_exchange/data)